

長岡郡 地域記録集 土佐の村々1 高知県長岡郡大豊町立川地区

# 立川上名村 立川下名村

〈その二〉番外篇 — 六集落の地域遺産 —



## 刈谷



## 中和

## 一の瀬

## 三谷

## 仁尾ケ内



## 中央



人々が実感をもつて生きる地域単位を主題として地域記録集は、第一号で長岡郡立川上名村・立川下名村をとりあげた。

現代の行政区分ではなく、敢えて「江戸時代の村」を単位として始まった調査であったが、村の生活の中で機能しているのは、更に小さな村の中の小村であり、江戸時代に編まれた地誌類に登場する各村内の地名がこれと一致していることに気づくのに、そう時間は掛からなかった。

小さな谷筋ごとに暮らしを紡ぐ。同じ集落内でも、向かいの谷筋の神社には行ったことがないという古老の証言は、人が生きていくことは、実にきめ細かな作業の連続であることを思い起こさせた。

今後も、地域記録集は江戸時代の村単位を基本として編集していくが、住民の生活に密着した究極の地域単位を改めて確認しておこうと試みたのが、立川番外篇ともいえる本号である。

### 編集後記

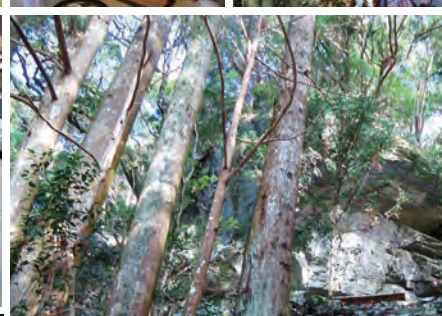
峻険な山々に囲まれた立川という小世界。清らかな渓谷や静寂な山間のなかで、営々と積み重ねられた歴史を肌で感じ続けた三年間であった。

ある村人の「遅かった。もう少し早く来てくれたらよかった。」の言葉が印象に残る。この十数年の間に、主を失った家、祭が途絶えた神社が年々増え、村の歴史をつぶさに知る古老たちは急速に減ってしまったという。

とはいえ、改めて村の各所に分け入ってみると、誰もが知っている「立川」に加え、身近であるがゆえに、いつの間にか振り向かれなくなった、思いがけない歴史を見出すこともしばしばであった。村はまだ歴史に裏打ちされた様々な可能性を秘めている。

私たちと村の人たちが再確認した立川の記録(番外篇)をおとどけする。

企画員 筒井聡史



地域記録集 土佐の村々1 高知県長岡郡大豊町立川地区

長岡郡 立川上名村・立川下名村  
〈その二〉番外篇  
— 六集落の地域遺産 —

発行 平成28年(2016)3月31日  
編集者 土佐山内家宝物資料館  
渡部 淳(館長)  
横山和弘(企画課長)  
富井 優(学芸員)  
筒井聡史(企画員)  
デザイン タケムラデザインアンドプランニング

※各集落の人口と世帯数は平成28年3月1日時点の数値(大豊町役場 人口世帯集計表より) ※各集落のホノギ図は大豊町教育委員会提供の地籍図より作成  
※本冊子の地形図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図25000を複製したものである(承認番号 平28情復、第38号)。



# 仁尾ヶ内



**立川**の北西部に位置する。立川上名に属し、北は愛媛県、西は本山町に接する。他の集落と比べ200メートル程度標高が高く、毎年30センチ程の積雪を見る。

仁尾ヶ内の集落は、立川川を境に北部の「ヒノチ」(本村ともいう)と南部の「カゲチ」に分かれる。二つの小村とも山の斜面に家々が点在し、現在14戸21人が暮らしている。

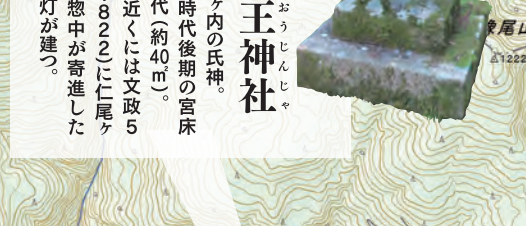
往時、この地の人々は林業に従事する「山師」が多かった。集落の西方に位置する「官山」(国有林地帯)は、江戸時代は土佐藩の御留山であった。



**黒王神社**  
仁尾ヶ内の氏神。江戸時代後期の宮床は2代(約40m)。鳥居近くには文政5年(1822)に仁尾ヶ内村惣中が寄進した常夜灯が建つ。



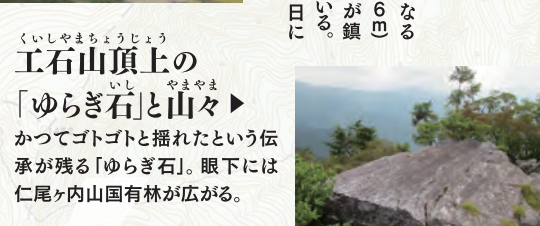
**観音堂**  
正面・側面ともに1間の宝形造。鯉口(室町時代)や聖観音立像(江戸時代)、棟札が伝わる。年に一度お祭りを行う。



**工石山と白山神社**  
大豊町と本山町に連なる工石山(標高約1516m)の山頂には白山神社が鎮座。神鏡が安置されている。現在毎年旧暦6月18日にお祭りを行っている。



**工石山頂上の「ゆらぎ石」と山々**  
かつてゴトゴトと揺れたという伝承が残る「ゆらぎ石」。眼下には仁尾ヶ内山国有林が広がる。



**新田神社**  
カゲチの氏神。江戸時代後期の社地は2代(約40m)。豊楽寺との関係を示す棟札や、社殿改築、鳥居再建の棟札などが現存する。



**立川川源流 第一の標札**  
第一から第三までの標札が存在する。

**旧立川尋常小学校 仁尾ヶ内分教場跡**  
昭和10年(1935)設立、昭和48年(1973)に廃校となり立川小学校に統合された。写真は分教場の外観。現在建物は残っていない。



**アケボノツツジ**  
5月ごろ、見頃を迎える。



直径17.5cm、総厚5.5cmの室町時代の鯉口。銘には「伊予国新居郡角村於天淨[ ]」「応永廿二年七月吉日大願主[ ]」とあり、応永22年(1415)に、現在の愛媛県新居浜市角野付近で制作されたことが知られる。立川にもたらされた経緯については未詳である。  
画像:大豊町教育委員会



**新田神社の棟札**  
享保3年(1718)、豊楽寺の賢普が導師を勤め、新田大明神宮の再興を祈願した際のもの。(写真は表・裏)



**黒王神社の木器類**  
幕末に木地師小椋氏が奉納したものなど、江戸から大正までの木器類が伝わる。仁尾ヶ内には「キジャドコ」という字名も残る。



**木造聖観音立像**  
観音堂の本尊で、江戸時代の作。檜の一本造で彩色が施されている。像高39.3cm。



**白山神社の神鏡**  
「藤原光永」の銘があるが、制作年代は未詳。



**黒王神社の棟札**  
社殿改修、屋根葺き、鳥居再建など、江戸から平成までの各時代の棟札が伝わる。



**白山神社のまつり**  
旧暦の6月18日、工石山の山頂に鎮座する白山神社の例祭が行われる。祭日当日は、住民と神職は早朝に集落を出発し、登山口まで約40分車を走らせ、さらに40分ほど山を登って神社に向かわなければならない。近年では、関係者の高齢化により山頂での祭りが困難になったため、登山口に分祀された神社で祈禱が行われ、その後、集落の有志数名が山頂の本宮へお供え物を持って登るようになってきた。昭和の中頃までは車道は無く、前日に集落を出発し登山口近くの「ツヤデン」という経由地へ一泊してから登っていた。当時は他の集落や本山町からも多くの人が参拝に訪れていて、祭りの世話人は、いち早く山頂に登り、ゆらぎ石の上で参拝者をもてなしていたという。

## 仁尾ヶ内の文化財

仁尾ヶ内では、観音堂・黒王神社・新田神社、そして工石山の山頂にある白山神社等に文化財が伝わる。

観音堂の鯉口は、高知県内でも数少ない室町時代の作で、隣国伊予国(愛媛県)からもたらされた物である。国境に位置する立川の地域性がその来歴にも反映されている。一方、幕末に木地師が奉納した黒王神社の木器類は、素朴な作りの中に、山間を移動しながら生活していたであろう彼らの

姿を彷彿とさせてくれる。さて、立川地区の御堂や神社には数多くの棟札が伝わっており、この地区の文化的な特色の一つとなっている。

仁尾ヶ内でも観音堂以下に多くの棟札が伝わる。黒王神社に伝わる宝暦5年(1755)の神社新建立棟札は、本願主本山氏(上名庄屋本山家の関係者と思われる)を筆頭に、仁尾ヶ内の年寄、五人組頭、そして仁尾ヶ内の惣氏子中が納めたものである。神社建立にあたり村人たちが込めた様々な願いが、時を越え、棟札の形となって今に伝わっている。

## 仁尾ヶ内の主な文化財

- 鑄銅製鯉口 室町時代 応永22年(1415) / 観音堂
- 木造聖観音立像 江戸時代 / 観音堂
- 観世音菩薩尊像再興棟札 江戸時代 宝永7年(1710) / 観音堂
- 金龍大明神宮諸願成就所棟札 江戸時代 寛永16年(1639) / 黒王神社
- 木造狛犬 江戸時代 文化8年(1811) / 黒王神社
- 木地師奉納木器類 江戸時代 嘉永6年(1853) / 黒王神社
- 新田大明神宮再興棟札 江戸時代 享保3年(1718) / 新田神社
- 鳥居建立奉納木札 明治時代 明治9年(1876) / 白山神社



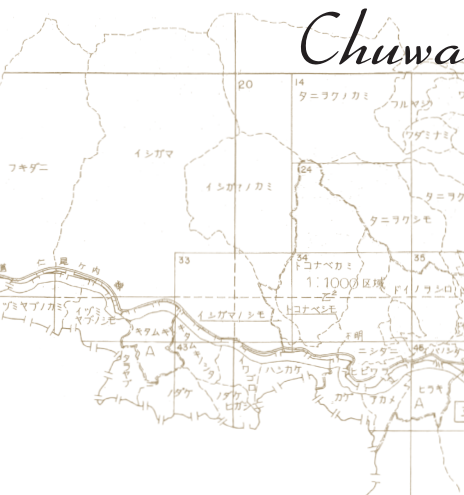
**区長の話**  
～山師の村～

林業に携わる小笠原徳孝区長(59)によると、かつて村の山師は、尻皮を尻に敷いてノコギリで木を切り、切り出した材木を立川川に流して運んでいたという。山の仕事は今より多種の作業があり、人手も多く必要だった。そのため、仁尾ヶ内では女性も含め住人のほとんどが山の仕事をしていた時期があったという。現在、林業は後継者不足と恐れられ、多くの現場で若い世代が活躍している。山の未来に限って言えばそれほど悲観はしていない。





# 中和



**仁** 尾ヶ内の東隣に位置する。立川上名に属し、東は刈谷、南は中央に接する。

集落の東部で、仁尾ヶ内より流れる立川川と、刈谷より流れる川奥谷川(藤川)が合流する。立川川上流の「中の村」と下流の「和田」をあわせて中和という集落が形成されており、現在20戸32人が暮らしている。

中和は、中世の山城跡や江戸時代に人や物資の往来を管理した上名番所跡があり、現在は立川で唯一の郵便局が設置されるなど、立川上名における重要な地域であることが分かる。

## 地蔵堂の木造薬師如来坐像



鎌倉時代の作。像高62cm、檜の一木造で顔面ならびに体部に漆箔が施されている。右手をまげて掌を前にして立て、左手はまげて膝の上において掌を上にする。左手掌には薬壺(現在は欠失)を留めてあったと思われる竹釘が残る。

画像:大豊町教育委員会

## 中和の文化財

中和では、地蔵堂・橋掛神社・八坂神社・多賀神社等に文化財が伝わる。

現在地蔵堂にある木造薬師如来坐像は、もとは東福寺(現在廃寺)にあった仏像と考えられている。江戸中期に編まれた『土佐州郡志』によると、東福寺は地蔵堂と同じ場所所に在り、戦国時代に立川城を拠点にした長越前守の菩提寺であったという。長氏は、本山城(本山町)を拠点にした有力国人領主本山氏の家臣であり、本像の伝来にも本山氏の政治文化圏の広がりが関係しているのかもしれない。伝来の詳細については不明であるが、鎌倉時代の地方仏として出色のものである。

### 中和の主な文化財

- 木造薬師如来坐像  
鎌倉時代 / 地蔵堂
- 石造地蔵菩薩坐像  
江戸時代 / 地蔵堂
- 橋掛大明神宮新再興棟札  
江戸時代 享保15年(1730) / 橋掛神社
- 橋掛大明神宮本社拝殿建立寄進板書  
江戸時代 文化15年(1818) / 橋掛神社
- 橋掛神社神前奉納俳諧連歌板書  
大正時代 大正11年(1922) / 橋掛神社
- 祇園宮上葺棟札  
江戸時代 文久3年(1863) / 橋掛神社(八坂神社)
- 上名庄屋本山家墓所  
江戸時代ほか

## 上名庄屋本山家墓所

文化11年(1814)、88歳で没している。



江戸時代、上名では本山家が庄屋役を世襲した。小高い丘の上に、18世紀後半以降の墓石が残る。



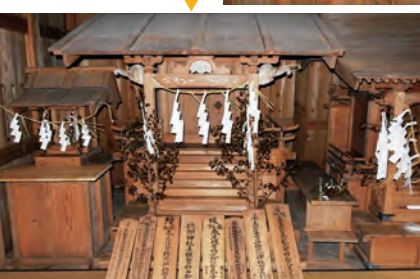
## 本山清五右衛門の墓

## 八坂神社の幕末維新期の棟札



左は弘化2年(1845)の祇園三社建立棟札、中央は文久3年(1863)の祇園宮上葺棟札、右は明治7年(1874)の八坂神社鳥居建立棟札。

橋掛神社の棟札と板書  
文化15年(1818)本社・拝殿の建立につき、氏子講中44名の寄進者名を記す(上)。社殿改築・屋根替・鳥居建立など、江戸から昭和までの各時代の棟札が伝わる(下)。



## 上名と下名の一番地

立川川と川奥谷川の合流部付近、中和と刈谷の家々が接するこの地域には、立川上名と下名の地番の始点がある。地番は、明治初期に始まった土地一筆ごとに番号を付ける制度で、立川では上名と下名をそれぞれ地番区域としている。古老によると、二つの一番地を始点に、上名では中和・仁尾ヶ内、中央一の瀬の順に地番の数が増え、下名では、刈谷、中央、三谷一の瀬の順に地番の数が増えていくという。地番が付けられた当時、立川の中心地であったこの地域に、一番地を置いたのではないかとのことである。江戸時代、一番地の近辺には各村の庄屋と番所が置かれていた。かつての立川における「公的」な場所を基準として、地番が付けられたのかもしれない。



▲上名・下名の1〜3番地をそれぞれ①、②、③で表示  
大豊町役場地籍調査班所有の地番図より作成



▲上名一番地の絵図面(明治中期)  
「土地一筆限図面 立川上名」(個人蔵)より

### 参勤交代の道筋

## 地蔵堂

正面・側面ともに1間の宝形造。中和・刈谷両集落の御堂として、現在年に一度、4月頃にお祭りが行われている。



## 立川城跡

戦国時代、本山氏家臣の長越前守の居城と伝わる。



## 大橋の淵

澄みきった水が流れる大橋の淵は、恰好の遊び場となる。



## 警護屋跡

参勤交代の際、従者が分宿した場所の一つである。江戸参勤の折、藩士たちが領内最後の宿をとったこの場所には、残念ながら建物などは残っていない。



## 上名村番所跡

設置年代は未詳。上名村庄屋の本山家の居所で、代々番人を兼任した。高知城下から12里(約47km)に位置する。

## 橋掛神社

中和の氏神。江戸時代後期の社地は2代3歩(約50m)。本殿近くに、山の神とされる神木がある。1月、5月にお祭りを行う。



## 区長の話

上名と郷社



立川は、立川川と川奥谷川(※)を境として上名と下名に分かれ、それぞれに郷社がある。上名の郷社は天神宮だが、どういわけか下名地(中央)に建っている。そのため地元では、下名の土地を借りて建つ神社という意味で「コウチノミヤ」(借り地の宮)とも呼ぶ。こう話す宮川利重区長(74)の曾祖父は上名を管轄する神職だったという。天神宮に納められる明治時代の棟札に、その名前を確認することが出来る。

※川奥谷川上流部の河又橋付近から笹ヶ峰までは尾根筋が境となる